

研究分野のキーワード：福祉臨床の哲学，コミュニケーション，ケア思想

研究紹介

人間の本質は「コミュニケーション」です。その語源は「わかち合うこと」ですが、自己は他者において自己たり得るということからすれば、私たちの存在そのものがコミュニケーションの磁場のうえに成り立っているといえることができます。

さて、私の研究フィールドである社会福祉学は、老いや病、障がいや貧困などによって生ずる生活課題に対して何らかの支援（ケアも含めて）を提供することが専門的な関心事です。個人としても、家族としても、あるいは地域においても、生きていくうえで不可避的な原事実として上記の課題があります。近代以降、老いや病、障がいなどは、医療や福祉の対象ではあっても、人間として「ふつうに生きる」テーマにはなり得ませんでした。健康や若さ、強さや自立が〈光〉として強調されるのに対して、老いや病、障がいは人間存在の〈陰〉としての位置づけでしかなかったからです。

〈いのち〉はすべて健康と病、若さと老い等の〈間〉に在るとすれば、後者の在りようにも大切な意味があり、それ自体がかけがえのない〈いのち〉のすがたであるといっても過言ではありません。あらためて老いや病、障がいなどの体験世界に光を当てて、その意味理解をとおして、支援やケアの成り立ちを探ることが「福祉臨床の哲学」の主題なのです。それは「コミュニケーション」の回復といってもよいほどに人間の本質に関わる主題なのですが、近代の人間像を根底から問い直すほどに根気のいる作業なのです。

【研究事例】

この数年、重症心身障がい児（者）の在宅・地域支援のプログラムづくりを研究しています。重症児（者）といわれる人たちは、今もなお医療・福祉施策のすき間にあり、最も厳しい状況を抱えています。障がいが重いから問題なのではなく、多様な生活ニーズをもっているにもかかわらず、それに即応した適切な支援が少ないことが問題なのです。ベットのうえではなく、活動や参加をとおして「ふつうの暮らし」を実現していくために、どのようなプログラムやシステムがあればよいのか、その展望を求めて懸命に取り組んでいます。